

学内研究組織（2024年度）

研究課題：「戦前期日本外交における女性平和運動：婦人平和協会と女性キリスト者知識人」

キリスト者知識人から見る近代日本外交の可能性

Modern Japanese Diplomacy from the Perspective of Christian Intellectuals

湯浅 拓也 (Takuya Yuasa)

2022年度より科研費「戦前期日本外交における女性平和運動：婦人平和協会と女性キリスト者知識人」(22K13353) のプロジェクトに取り組んでいる。すでに2023年度の学内研究組織の成果報告として、その研究概要を産業研究所所報（第48号）に掲載しているので、重複は避けるが、その要点を改めて言及しておきたい。この学内研究組織では、宗教的なネットワークなどを背景に活躍した日本人キリスト者知識人が多くいたことに注目し、その中でも戦間期に平和運動を展開した女性キリスト者知識人について研究を行っている。主に注目している人物は、恵泉女学園の創設者として知られる河井道である。

河井道をはじめとした女性キリスト者知識人による平和運動について研究を進めていく中で、第一次世界大戦後に設立された婦人平和協会など、その組織の概要や活動内容が明らかになった。また、彼女らがどのような問題意識で取り組んでいたかという思想的な背景も明らかにすることができた。この点については、日本国際政治学会（「近代日本外交における女性平和運動：河井道のYWCAでの実践とそれを支えた思想」日本国際政治学会2022年度研究大会、ジェンダー分科会A-5、2022年10月30日）と国際日本文化学会（「国際文化交流における宗教—近代日本のキリスト者とミッショナリーの関係性から—」日本国際文化学会2023年度全国大会、共通論題③「『国民国家以後の時代』の国際文化交流再考—理念、主体、媒介を中心に—」2023年7月9日）において発表してきた。

こうした研究成果を通じて、2024年度より大きな問題意識に关心を持つようになった。具体的に言えば、近代日本の国際交流の流れを宗教に軸を置いた国際文化交流とともに論じができるのではないかという点である。すでに岩倉使節団や「お雇い外国人」については研究が多くあるが、日本に派遣された宣教師の役割やそれを受け入れた人物たちについてはあまり研究されていない。こうした問題意識を踏まえて、学内研究組織の研究費を活用し、近代日本の国際文化交流の主体という大きな文脈で研究を進めてきた。すでに山田敦・和田洋典・倉科一希編『新版・国際関係学』有信堂高文社、2025年の「宗教」（第III部第7章）においてその成果を発表している。また、「戦前期キリスト者による国際文化交流」という小論が日本国際文化学会編『共に生きるための国際文化学』と題して、2025年度中に出版される予定である。これら成果を踏まえて、科研費の成果物も2025年度中に公開できるように、これから研究を進めていきたい。